

後援会ニュース「しおかぜ」は街づくりのコミュニティ紙として皆さんの暖かいご支援をお願いします。ご意見をお聞かせください。



しおかぜ

日本共産党浦安市東部後援会
News

第44号

2011年12月8日
編集責任者 元木計文
047-355-8526
部内資料



浦安の津波

あの震災の日、ひどい揺れから我に返って暫く経ちました。今度は、パトカーの津波の警報に促されて所定の避難場所に向いました。東京湾の最奥部に津波なんて来るのか来ないのか、正確な知識と情報を持ち合わせていない私には何か釈然としない不安と疑問を感じながら、すぐ小学校に着きました。そして、三番瀬すぐ横にある体育館の様子を見て、これは意味がないなと思いながらまた自宅に引き返しました。

後で、東北地方太平洋沿岸部の生々しい津波の光景をテレビに見せられながら、あの時漫然としていた自分を思い出し、少し慄然としたものです。他の人も似たような様子だったようで、今回思い切って知識だけでも持っておこうと、重い腰を上げて浦安図書館と市の防災課等々に行き調べてみることにしました。これはその簡単な調査の報告です。

まず、浦安の津波の歴史です。記録に残るものとしては鎌倉時代（永仁元年）の大津波を始まりとして、江戸時代にはたびたび、大正6年にも大きな津波被害に見舞われています。関東大震災時は、浦安も地震被害は惨憺たるものでしたが、津波に限定すれば特に触れられていません。その多くは台風などによる高潮と複合した被害であっ

たようです。もとより、昔のことですから今の海岸線・河川の状況とは大きく異なりますが、何度もひどい被害に会っていることは事実です。以上は昭和44年発行の浦安町誌（上）に詳しく書かれています。興味ある方は必見です。

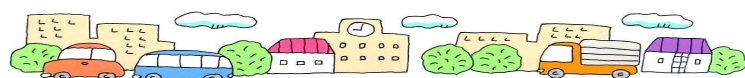
次は、今回の地震による浦安での津波の状況です。日の出護岸で1m程度、川をさか上った猫実排水機場で2.1mが計測されたようです。市は過去の伊勢湾台風時の高潮3mを想定した高潮対策として整備された沿岸部は7.1m、河川は5.6mの堤防で守られているから大丈夫としています。



また、平成17年に出された（最新）「首都直下地震対策専門調査会報告」によると、首都直下の地震が発生した場合の津波の想定は、5断層を想定の対象として、50cmが最大としています。（今回とすでに乖離があります）。

ところが、今回の地震の結果・予測について国も学者も反省しきりです。想定外という言葉が悲しいはやり言葉となっていますが、完全なコントロール下に置かれていないということが判然とした原発もさることながら、地震・津波は自然が為せる業です。中央防災会議も来夏には想定を見直すようです。それに基づいて浦安市も防災計画を見直します。注目しなければなりません。

東京湾口が狭まっている、東京湾自体は浅い海だといいつつも、想像するのも怖いような事態が発生する可能性があります。その時、いかに迅速で正確な情報が大事かということを私達は経験しました。こうした取り組みを市政に



はお願いするとともに、小高い丘とかのない浦安においては、身の近くのビルとかに普段から自分で逃げ込むべき場所を決めておくことが必要だということを、調べていく中で痛感しました。行政による避難誘導計画の策定が必要ではないでしょうか。海辺の町に私達は住んでいるのです。

<元木 計文>

道路と隣接宅地との一体的な液状化対策事業、どこまで進む？



市議会議員 元木美奈子

巨大な地震が起これば浦安市は元町も含めて地盤が再び液状化することを専門家が指摘しています。市内全域の予防対策は不可欠。国もこうした問題意識からか、第3次補正予算に「液状化対策推進事業」を創設しました。この事業が一体どういう内容か、市の担当の職員に聞いても埒が明かないため、11月10日、国土交通省へ出向き聞いてきました。

公園・道路などの地盤改良は殆ど国からの交付金などで措置されるものの、民地は所有者負担だということです。地盤改良で地盤の強度が高まり、一方、民地で改良工事がされなければ、強度の差が生じ、民地が影響を受け、再び沈下・傾きなどが生ずることは明らか。すでに修正工事が市内のあちこちで進んでいるも、この事業にどれだけの住民が参加するのか、事業の有効性に疑問は高まります。

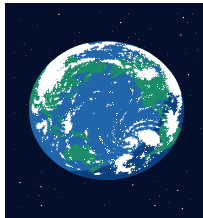


前回43号の「地球環境と光合成」の問題の解答は以下の通りでした。

(ア) 60、(イ) 加減または増減、(ウ) 約 600、
(エ) 0.035、(オ) 紫外線、(カ) DNA または遺伝子
(キ) 発酵または嫌気呼吸、(ク) 真核、(ケ) 19

放射能こわいよ 村とますえ
 ぢや
 まいじりおもひろいから
 まいじりのは草木とおんなじに
 あどもも元氣にしてくれんのだよ
 でも今はだめだ
 原発が爆発してこわい放射能が
 雨といっしょにふってきた
 ぢやがいるやこはきのつゆの雨の水たまりなんだ
 放射能がいはれたまってるよ
 いやなやつだよ 原発で
 あどもの遊び場の公園なのに
 ぢや
 帰ったらおばあちゃんに手を洗ってもらうんだよ

地球環境と光合成生物



II. 初期の光合成生物

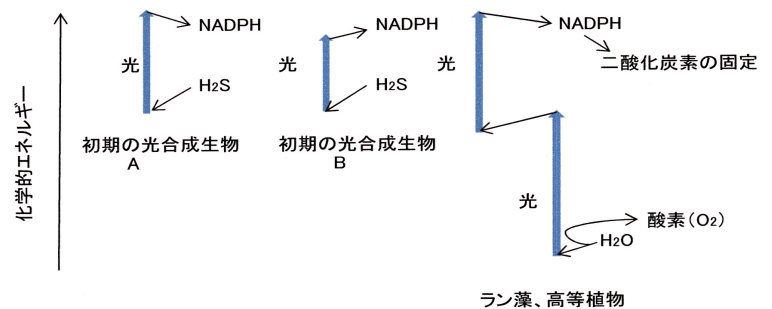
現在私達が目にするほとんどの光合成生物は、光のエネルギーを2個、直立的に利用し、水を分解して酸素を発生し、同時にATPと共に二酸化炭素を固定(有機物に変換)できるエネルギーの高い物質(NADPH)を作り出しています(酸素発生型光合成生物)。しかし、その様な高度な反応は、最初から備わっていたわけではありませんでした。光は、波の性質を持っていますが、エネルギーの面から見ると、粒(光量子)になっており、1個、2個と数える事が出来ます。

最初の光合成生物は、光のエネルギーを1個だけ利用し、有機物質や硫化水素(H₂S)などのある程度エネルギーの高い物質から、より高いエネルギーを持つ物質を作り出すと共に、生物の別のエネルギー源であるATPと言う物質を作り出しています(非酸素発生型光合成生物)。この様な光合成生物は、緑色硫黄細菌や、紅色硫黄細菌を含み、温泉地や、酸素は届かないが光が届く深い湖の中間部分に、赤い層として存在しています。

非酸素発生型光合成生物には二種類あって、1つは、二酸化炭素を固定できるNADPHを直接作れるタイプ(生物A)で、他の1つは、直接的にはNADPHより低いエネルギーの物しか作れないが、別の光のエネルギーを利用してNADPHを生成するタイプ(生物B)です。これは、後者の種類が、エネルギーの低い長波長の光(赤外線)を利用している事とも関係があります。(酸素がほとんど無かった初期の地球では、紫外線が地表面に降り注いでいたので、生物は、泥の中や濁った水中にしか住めなかった事と関係があるのでしょうか。)それでも、ほぼ無尽蔵に存在する光をエネルギー源として有機物を作る事は大変な発明で、初期の光合成生物は大繁栄した

と想像されますが、その基になった硫化水素等の資源は限られていたので、一定の規模に留まっていたはずですが。

次の大発明は、ラン藻の先祖の種に初期の光合成生物の二つの種類の遺伝子(DNA)が同居した事に始まりました。二つの光を利用したシステムを直列につなぐ事で、NADPHを作ると共に、これまで利用できなかった低いエネルギーしか持たない水(H₂O)を利用できるようになったのです。2分子の水から4個の電子を奪うと、酸素が1分子出来ます。ほぼ無尽蔵にある光と水を利用して有機物を作る事に因って、光合成生物は大繁栄し、地球を変えていったのです。



望年会

東日本大震災、そして原発事故・・・
 今年は大変な1年でしたが、温泉で疲れを癒し、来年を展望する望年会を下記日時に
 行います。みなさん、是非ご参加下さい。



■日時 12月24日(土) 午前10時30分集合

・集合場所：入船東エステート団地前・ダイエー側

■場所 グリーンスパ市川(健康市川温泉)

■会費 2,500円(飲食・入浴料・交通費含む)

■連絡先 元木 355-8526

・予約が必要なため参加者は17日迄ご連絡下さい。

■主催 日本共産党東部後援会